# ゼロ初級中心の日本語学習者と母語話者との交流の実践

土居美有紀

**要　旨**

本稿は、3週間だけ本学で日本語を中心に学ぶゼロ初級レベル中心の日本語学習者と本学の日本人学生との交流の実践報告である。週1回全3回行われた活動を2016年3月から2017年8月実施までの四期に渡り振り返り、課題と発見を報告する。全3回のうち2回行った日本語母語話者を教室に招くビジターセッション（VS）では、毎回学習者の数だけ日本人を集めることが課題となった。使用する教材に関しては、具体的な質問を与えること、質問して答えを表に書き、お互いの国を比較しながら個人的な経験も語れるものが話しやすいことがわかった。また、毎回学習者とビジターのやりとりに耳を傾け、学習者が知っていれば便利であろうと思われる表現を次回の配付物に載せておくことも有効であると考えられる。

**キーワード**：ゼロ初級、日本語学習、ビジターセッション、日本人、交流

## 1. はじめに

2016年に本学では大学世界展開力強化事業として、ラテンアメリカプログラム（以下LAP）が始まった。これは上智大学と連携して行っており、中南米からの留学生が上智大学で半年～1年勉強する前に、本学で3週間日本語の基礎を集中的に学ぶ日本語集中コースの他にインターンシップも行うものである[1)]。この3週間のプログラムは、週8コマ（1コマ90分）の日本語集中の授業（コミュニケーション5コマと読み書き3コマ）の他、週3コマのJapanese for Practical Use（以下JPU）から成っている。このJPUでは、企業でのインターンシップや学校などへのフィールドトリップの準備、日本人学生との交流、日本について調べ発表するミニプロジェクトを行っている。本稿ではJPUの日本人学生との交流について、課題と改善点を担当教員の授業観察記録をもとに報告する。

## 2. 先行研究

コミュニケーションは社会・文化・経済的なインターアクションの手段にすぎないという考えから、日本語教育の目的は、語学（言語能力）教育から、コミュニケーション（言

語能力＋社会文化能力）教育、さらに広いインターアクション（言語、社会言語および社会文化能力）教育へと移行してきた（ネウストプニー 1991）。ネウストプニーは社会文化能力と社会言語能力を強調し、教育課程の中に実際のコミュニケーション場面の使用を取り入れた「インターアクション教育」を提唱している。このインターアクション教育では、学習を「訂正過程」としてとらえており、インターアクションに「問題」（非適切さ）があれば、それを解決するために「アクティビティー」（活動）が適用される。そしてアクティビティーには、「解釈アクティビティー」、「練習アクティビティー」、「実際使用（パフォーマンス）アクティビティー」の3つがある。「解釈アクティビティー」は、教師による説明などの問題解決方法が学習者に直接提供されるもので、「練習アクティビティー」は、ロールプレイなどにより学習者に練習のためのインターアクション行為を生成させるものである。しかし、この練習アクティビティーでは、インターアクションの目的、参加者、伝えたい内容、時間的な制約などの実際のコミュニケーションでは話者が場面から読み取るコミュニケーションの特徴が教師によって与えられている。従って、練習アクティビティーだけでは、学習者は教室でできた行動を実際の場面では再現することができないということが起こってしまう。そこでネウストプニーは、インターアクションの本当の使用場面を直接教育課程の中に置く「実際使用アクティビティー」を導入する必要があると述べている。実際使用アクティビティーの主な例には、家庭訪問や会社訪問など学習者が日本人コミュニティーに出向くものと、学習者が日本語を勉強している教室に教師以外の日本語母語話者を招くビジターセッション（以下VS）がある（ネウストプニー 1991、サウクエン 2005）。

VSについての実践は数多く報告されている。初級レベルのVSでは、モデル会話の練習、初級文型の練習や既習項目でできるインタビューなどのペアワークが行われることが多く、中級レベルでは機能別会話練習やあるトピックについて自由に話す活動、中上級では留学生のプロジェクトワークの成果発表を聞いて意見交換をするなど、上のレベルになればなるほどより自由度の高いインターアクションが行われている（サウクエン2005、永井2012、赤木2013）。また初級初期の学習者を対象としたものには、関（2007）の初級初期学習者とビジターの対等な関係作りについて述べたものがあるが、初級初期といっても、VSまでに約30 ～ 40時間の学習時間を経験し、名詞文、動詞文、形容詞文の短文がなんとか自力で作れるレベルの初級学習者を対象としている。

このようにVSは中上級か初級でもある程度日本語でコミュニケーションが取れる学習者を対象に行われたものの報告が多いが、本稿では主にゼロ初級の学習者を対象に行われたVSについて報告したい。

## 3. 実践概要

本コースのJPUにおける日本人学生との交流は、学習者が本学で学ぶ3週間の間に3回（90分が週1回）行われた。ネウストプニー（1991）、サウクエン（2005）の実際使用アクティビティーの例で挙げられている、①学習者が日本人コミュニティーに出向くものと、②日本語母語話者を教室に招くビジターセッション（VS）を取り入れた。具体的には、①は本学の茶道部に見学を依頼し（1回）、②は本学の日本人学生に教室に来てもらった（2回）。学習者はアルゼンチン、コロンビア、チリ、ブラジル、ペルー、メキシコからの学生であった。学習者の日本語力、実施内容が毎回少しずつ異なるので、運営方法に関しては「4. 各期間の交流活動と教員の振り返り」で第一期～第四期の実施期間ごとに記す。

### 3.1. 通常学期のVSとの違い

多くの大学で行われているVSは、中上級かある程度日本語でのやりとり可能な初級後半レベルでの実施例が多いことは先に述べた。本学の主に交換留学生を対象とした通常学期の留学生別科の授業でも、初級クラスでVSを始めるのは初級日本語の教科書「げんき1」の5課が終わったあたり（授業開始後4～5週目頃）で、基本的な動詞と形容詞を学習してからである。一方LAPの学生が本学で学ぶ期間は3週間で、日本語集中の授業開始日から3、4日程度でVSが始まる。つまり通常学期の学生より少ない日本語の知識でVSを体験することになる。通常、初級クラスにおけるVSは日本語の授業の延長と考えられ、授業で習ったことをVSの日本人とのやりとりを通し現実の世界に近づけるものだが、LAPの3、4日間の日本語の授業でカバーできる内容は少なく、通常のVSのような既習文法項目を使った練習だけではできることが限られてしまう。また、このVSの時間は、いわゆる「日本語の授業」の時間とは別枠に設けられたものなので、通常学期のVSとは目的を変え、日本語の文型練習だけではなく、日本人学生と交流すること自体とお互いの文化や習慣を知る文化交流を目的とすることにした。従って、通常学期のVSとは異なり、コミュニケーションが難しい場合は英語やスペイン語で補ってもよいこととした。

## 4. 各期間の交流活動と教員の振り返り

**＜第一期：2016年3月実施＞**

学習者は4名で全員ゼロ初級レベルであった。ビジターは、本学に在籍する日本人学生で、LAPのペルースタディーツアー（以下ペルスタ）に参加し、ペルーに短期留学する学生が協力してくれることになっていた。また本学のスペイン・ラテンアメリカ学科（以下スペラテ）の教員もゼミ生に参加を呼びかけてくれた。

1. 授業内容

第1回の授業実施は、日本語集中の授業を7.5時間（90分×5回）受けた後であった。学習者が習った日本語がわずかであること、ペルスタ参加の日本人学生が協力してくれると聞いていたが、参加希望者が1名しかいなかったこともあり、初日に茶道部の見学を行うことにした。本学の交換留学生の中には留学中にサークルに参加し日本人の友達を増やしたり、大学祭に参加して貴重な体験をしたりしたという者も少なくない。LAPの学生も東京でより充実した留学生活が過ごせるように、サークルに入ることを提案しようと考えた。そして、一例として本学の茶道部の活動を見学し、日本の部活やサークル活動のイメージを持ってもらおうとした。茶道部を選んだのは、本学の交換留学生は茶道や書道などの日本文化を学ぶ授業が取れるが、LAPにはそのような授業が組み込まれていないこと、日本らしい部活の方が学習者は興味が持てるのではないかと考えたことからである。また、茶道部は文化祭などで留学生を招いて茶道体験を行っているので、訪問を受け入れてくれるのではないか、他の部活とは異なり見るだけではなく比較的短い時間で活動を体験させてもらえるのではないかと考えた。さらに、通常クラブ活動は午後からであるが、茶道部の場合LAPの授業時間と部の活動時間が重なっている時間があり、午後はインターンシップやフィールドトリップに出かけるなどなにかと忙しいLAPの学生のスケジュールと合っていた。見学内容は、茶道体験と部員に1年間の活動内容を紹介してもらうというものにした。

第2回と3回の授業は、日本人学生を教室に招き、学習者と日本人を1対1のペアにしたVSを行った。内容は、①日本語集中の時間に習った文法を使ったインターアクション、②日本の文化についてのディスカッションであった。①はまず、学習者が日本語集中で習った表現を使って自己紹介をし、次に日本人学生に自己紹介をしてもらう代わりに学習者がインタビュー形式で質問し、その後、聞いた内容を使って学習者が日本人パートナーをクラスの前で紹介するという活動を行った。この一連の自己紹介活動の後は、学習者が授業で習った文法や表現を使った質問（13～15問）を書いた紙を日本人学生に配布し、学習者に質問してもらった。この時学習者は質問を見ることができず、聞いて答えなければならなかった。また、日本人学生には、リストの質問以外にも追加で質問をして自由に会話を広げてもよいと指示した。

②の「日本文化についてのディスカッション」では、文化交流を第一の目的とし、日本語の他に英語やスペイン語の使用もある程度認めた。第2回の授業（VS1回目）では、日本の地理とご当地グルメについて英語と日本語で書かれた短い読み物を3、4分で各自読み、少し知識を得てから、季節の食べ物や、日本人学生の出身地や有名なご当地グルメについて話した。第3回の授業（VS2回目）では、お互いの国のジェスチャーの違い、日本でよく見る看板や標識の意味、電車など公共施設でのルールの違いなどについて話した。

また、3月ということもありお花見について、何をするのか、おすすめの場所はどこか、学習者の国にも似たような季節のイベントがあるのかなどについても話した。いずれも、日本に初めて来た学習者がこれから日本で生活する上で役に立ったり、興味を持ったりするであろう日本の情報を供給するようにした。

2. 授業観察記録からの振り返り

ビジターに関しては、ペルスタとスペラテの学生に事務から連絡がいっているので担当教員は集める必要がないと思っていた。しかし実際は人数が集まっておらず、授業開始直前になって教員が急いで集めなければならなかった。ペルスタ参加の学生はVSにできるだけ参加することになってはいたが、参加義務はなかったのだ。またLAPのプログラムが始まる3月中旬は、日本人学生の春休みと重なり、スペイン語母語話者との交流に関心があり参加が期待されていたスペラテのゼミ生からも思ったほど反応がなかった。プログラム初日のウェルカムパーティーにペルスタの学生とスペラテのゼミ生が何名か参加してくれたので、もう一度一人一人直接声をかけ、やっと数人から協力を得ることができたが、それでも第1回の参加者はたった1名であった。不足分の人数集めと、スペイン語があまりわからないブラジルからの学習者のために英語が話せるビジターを探す必要が出たので、本学のCJS（Center for Japanese studies）に登録している日本人学生ボランティア（以下CJSボランティア）にメールを出し、ビジターの追加募集を行った。CJSボランティアの中には、通常学期の日本語授業のVSに参加してくれている学生も多いので、今回も初めからこちらのリソースを使えば、もう少し簡単にビジターを集められたかもしれない。しかし、せっかく中南米の学生が集まっているのだから、中南米やスペイン語に興味を持った日本人との交流に特化したものにしようと日本人のターゲットを絞ったが、それが裏目に出る結果となった。

茶道部への訪問については、学習者から好評で、インターアクティブな方法で日本の文化を知ることができてよかったという声があった。しかし、学習者は茶道体験自体には興味を持ったものの、その後のサークル活動紹介ではあまり話が続かなかった。この訪問のもう一つの目的は、学習者に日本の大学のサークル活動についてのイメージを持ってもらうことで、茶道部の日本人学生には新入生歓迎祭の時に1年生にサークルを紹介する時に話すような内容を話してほしいと伝えていた。しかし、初めの茶道体験が長引き、慣れない正座と茶道についての難しい日本語の会話に疲れたためか、学習者からはサークルの活動内容についての質問は出ず、サークルのアルバム写真を鑑賞して終わった。また、日本に来たばかりの学習者には日本の大学でサークルに入ることを考える余裕はまだなかったのかもしれない。

VSの教材に関しては、「②日本文化についてのディスカッション」で、季節の食べ物、ご当地グルメを扱ったが、会話はあまり盛り上がらなかった。若い日本人学生は、季節の

食べ物を楽しむ習慣がないどころか、どの季節にどんなものがよく食べられるかという知識さえない学生もおり、「秋と言えばさんま」と教員がヒントを出すとなるほどといった様子であった。学習者側も、国には四季がないので季節によって食べる食べ物が変わるということはないと、いまいち話が盛り上がらずに終わるペアもあった。またご当地グルメは、最近テレビや雑誌でB級グルメとともに特集が組まれるほど人気があり、名古屋と東京という2つの違う文化圏に滞在する学習者にはぜひ何かその土地のものを食べてもらいたいと思いトピックとして取り上げたが、会話の様子をうかがっていると世間のブームとは対照的にビジターの日本人学生にはあまり予備知識がないようであった。日本地図にご当地グルメが記されたカラーのご当地グルメマップを配布したが、あまり活用されることはなかった。また、日本人学生の出身地の有名な食べ物についての話も、日本食自体あまりなじみのない学習者には説明が難しく、話が続いていないようであった。唯一、名古屋めしの写真をいくつか載せ、下にひらがなで名前を書くというワークシートには、お互い楽しそうに取り組んでおり、日本人学生も留学生に味や近くの店などの説明ができていた。

**＜第二期：2016年8月実施＞**

学習者は、ゼロ初級レベルが3名、初級前半レベルが1名、中級レベルが1名の計5名であった。ビジターは、ペルスタとスペラテの学生に加え、CJSボランティアにも協力を求めた。

1. 第一期からの変更点

第1回の授業は、インターンシップの日程の都合上前回より少し遅れ、日本語集中の授業を12時間（90分×8回）受けた後に行われた。ゼロ初級の学習者と既習者がいたため、今回は日本語集中の授業が2レベルに分けて行われた。しかし、日本人との交流は2クラス合同で行われたため、VSで使用する教材を2種類作成し、それぞれのクラスで習った文法が練習できるものにした。また、②の「日本文化についてのディスカッション」の質問も修正を加えた。食べ物というテーマはそのままにし、典型的な食事にはどんなものがあるか、学生や社会人は昼食にどこでどんなものを食べるのか、晩ご飯は家族そろって食べるか、誰が料理するか、外食をするのはどんな時かなど、もう少し具体的に聞く質問にした[2)]。また、夏なので花見の話はやめ、国の祭や行事とその思い出について話してもらった。前回は学習者が日本について聞くという形式を取ったが、今回は学習者と日本人がお互いの国について聞き、共通点や違いを知るという構成にした。そして、「私の国では」と一般論を答えるものばかりではなく、お互いに自分の経験も語れる質問を増やした。

今回は第3回の授業で茶道部見学を行ったが内容も少し変更した。前回は茶道体験とサークル紹介の2本立てで、訪問時間が長すぎて学習者が疲れてしまったこと、また、今回は授業初日の自己紹介で「日本でやってみたいこと」として茶道を挙げる学生が5人中

3人もいたことから、日本文化体験に焦点を絞り、訪問では茶道体験だけを行うことにした。それから現場での学びを深めるために、事前学習として教室で茶道の歴史や考え方、マナーなどを英語で紹介したビデオ[3)]を視聴し、「お点前ちょうだいします」などのお茶会で使う日本語を練習してから訪問した。

2. 授業観察記録からの振り返り

ビジターに関しては、集めるリソースを増やしたので、第一期よりは集めやすくなった。しかし、一番参加してほしいペルスタの学生は来ても1度きりであったという問題は残った。

配付資料に関しては、ディスカッションの質問を具体的にしたことで話しやすくなったようで前回より話が続いていた。初級前半レベル以上の学習者は当然日本語で会話を行っていたが、ゼロ初級レベルの学習者でもビジターにあまり英語やスペイン語が通じない場合は自分の知っている日本語を駆使してなんとか日本語でコミュニケーションを取ろうとしていた。また、晩ご飯をあまり家族で一緒に食べないという話から、自分の国では、日本のように学生はみんな一斉に朝授業を受けるのではなく、昼や夜など自分で選んだ時間に授業を取ることができるなど文化の違いによるおもしろい話も学習者から出た。その他、今回は相手に質問して自分の国と比較しながら答えを表に書く形式のワークをいくつか採り入れたが、料理の比較がおもしろかった、もっとこのような表を使い国の比較をしたり、お互いに意見を出したりするワークシートにすれば話しやすいという声がビジターから聞けた。

茶道部訪問では、茶道体験そのものだけではなく、ビデオによる事前学習で茶道の考え方や概念が知れたこともよかったという声があった。ビデオで茶室の掛け軸やお花にはホストのおもてなしの精神が現れているという知識を得て、実際訪問した時和室の掛け軸を見て、書かれている文字の意味について尋ねた学習者もいた。

**＜第三期：2017年3月実施＞**

学習者は、ゼロ初級レベルが4名、初級前半レベルが2名、上級レベルが3名の計9名であった。ビジターは、今回もペルスタ、スペラテ、CJSボランティアに参加を呼びかけたが、今回の学習者には、日本語だけで対応可能な上級者、英語しかわからないゼロ初級の学習者などニーズが様々だったので、ビジター募集の際にどんな言語が話せるか、またどれくらいできるかを申告してもらい学習者とのマッチングを図った。

1. 第二期からの変更点

第1回の授業は、日本語集中の授業を9時間（90分×6回）受けた後に行われた。今回もゼロ初級の学習者と既習者がおり、既習者もさらに初級前半と上級レベルに分かれていたため、VSで使用する教材をそれぞれのレベルに合うように3種類作成した。また、前

回ゼロ初級の学習者でも自分の知識を総動員させて英語やスペイン語があまり通じない日本人と日本語でコミュニケーションを取ろうとしていたことから、今回はゼロ初級の学習者と初級前半レベルの学習者に配るプリントを同じものにし、指示や質問を簡単な日本語で書き、全ての漢字にルビをつけ、英訳もつけ、さらに「これは英語で何ですか」「ゆっくり話してください」などの会話に役立つ表現の他、その話題で役立つ表現（食べ物の話題なら味の表現）も載せた。茶道部の訪問は前回から内容変更せず3回目の授業で行った。

2. 授業観察記録からの振り返り

学習者の数が多かったため、ビジターに関しては参加希望者に友達を連れてきてくれるよう頼み、数を集めた。しかし無断欠席もあり、1対1で活動が行えないこともあった。

学習者の日本語レベルが異なるのでペアにより話す内容にも差があったが、ゼロ初級レベルの学習者でも与えられた質問からどんどん話を広げていっていた。既習文型を練習するＱ＆Ａから発展させて「こう言いたい時は何という？」とまだ授業で習っていない表現を日本人学生に聞き、日本語で言えることを増やそうとしている様子が見られた。

**＜第四期：2017年8月実施＞**

学習者は、ゼロ初級レベルが5名、初級前半レベルが2名の計7名であった。ビジターは、ペルスタに加え、今回初めて学内者への連絡に使われる情報連絡システム「ポルタ」に掲示を載せて募集した。参加希望者には担当教員にメール連絡するよう指示し、参加日と話せる言語、またどれくらいできるかを申告してもらい学習者とマッチングした。

1. 第三期からの変更点

第1回の授業は、日本語集中の授業を7.5時間（90分×5回）受けた後に行われた。茶道部の訪問は学外授業の日程の都合上第1回に、前回から内容変更せず行った。ビジター集めに関しては、CJSボランティアに呼びかけたり、参加してくれる人に友達も連れてきてくれるように頼んだりしていたが、無断欠席などもあり、学習者と同じ人数を集めるのが難しいことがあるという状況が続いていた。そこで今回は、学内連絡ツールを使い、学内者全員に向けてお知らせを出し、多めに募集した。

教材に関しては、今回のゼロ初級の学習者はひらがなの定着が遅く、また初級前半レベルの学習者も前回より学習歴が短くレベルが低かったので、前回の配布物に初級前半文法を使った簡単な日本語の質問の例をキーフレーズとしていくつか追加し、英訳とローマ字表記もつけた。

2. 授業観察記録からの振り返り

ビジターの対象を全学に広げたことにより、急な欠席者が出ても、学習者1人につき確実に日本人ビジターをつけることができた。しかし、優先されるべきペルスタからの参加者は1名で1回のみであった。

配布物に関しては、初級前半で習う文法や表現を使った質問の例をローマ字併記で追加したことにより、ゼロ初級の学習者も積極的にそのフレーズを使って会話していた。しかし、英訳とローマ字表記のおかげで日本語の意味がわかり、そのフレーズを使って日本人に質問することができても、その答えを理解することはなかなか難しいようであった。ビジターの返答は単語が難しかったり、質問で使った通りの文型や語順でなかったりするからだ。しかし、日本人の発話の中から知っている単語を拾い、そこから意味を推測して、言っているのはこういうことかと英語やスペイン語で意味を確認する学習者もいた。通常学期の初級レベルの交換留学生の中には、自分がわからない文型や表現を使って日本人が話せば、わからないと音を上げたり、わかったふりをして適当にごまかしたりする者も多いが、LAPのゼロ初級の学習者は知っている日本語がわずかでも物怖じせず、日本人学生とできるだけ日本語で会話を続けようとしており、とてもたくましかった。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、実際使用アクティビティーとして行った茶道部への訪問と、通常学期の「基本的な動詞や形容詞を学習済みの初級学習者を対象としたVS」ではなく、日本に来て初めて日本語を学ぶゼロ初級レベルの学習者を主に対象としたVSについて報告した。

VSはビジターである日本人学生が集まらなければ成立せず、ビジターの数は学習者と同人数確保することが望ましい。当初はこの交流の時間を、中南米からの留学生とペルスタの学生、スペラテの学生の交流に特化したものにしようと思っていが、ペルスタとスペラテの学生に呼びかけるだけでは十分なビジターを確保できなかったので、ターゲットを絞らず全学に呼びかけてビジターを集めることにした。一方で、本稿で述べたVSには、LAPの一部であるペルスタに参加するまたは過去に参加した日本人学生が協力することになっており、ビジター募集時には優先的にビジターとして選ばれる。しかしながら、ペルスタの学生はVSの参加にあまり積極的ではなかった。事務側ができるだけ参加するように呼びかけてくれてはいたものの、参加者は少なく参加しても1回のみが多く、第四期の実施では1名だけであった。VSの開催が日本人学生の長期休み中であること、家が大学から遠いなどの理由が原因として挙げられるが、一度アンケート調査などにより理由を探る必要があるだろう。またLAP全体のプログラムの一環としてペルスタの日本人学生にVS参加を課題として課すなど、参加を促す工夫もすべきであろう。VS担当教員はペルスタの日本人学生とは接点がないので、そのためには事務などと連携し取り組むことが不可欠であろう。

VSに使用する教材は、読み物や絵、写真など文化や習慣を紹介する資料を与え、興味を持ったことや知りたいことを日本人に直接聞くというスタイルよりも、具体的な質問を

与えたり、質問してお互いの国を比較しながら表を埋めるスタイルのワークの方が参加者は自分の経験を語ったり、話を発展させたりしやすく、話しやすいと感じることがわかった。

またゼロ初級レベルの学習者でも、教師の想像以上に意欲的に日本語を使おうとしていた。既習文法の質問から発展させて「ではこれは日本語で何というのか」と未習の表現も自主的に学び、日本語で言えることを増やそうとする姿勢がうかがえた。難しい場合は英語やスペイン語の使用も認めた文化のディスカッションでも、習った日本語を積極的に使おうとしていた。また日本人が言った日本語がわからなくてもその場をごまかすのではなく、知っている単語をヒントに推測し、こういうことを言っているのかと意味を確かめながら会話する学習者もいた。

これまで授業中の学習者とビジターの会話に耳を傾け、学習者が必要または知っていれば便利であろう表現を教材に追加し、修正を行ってきた。しかし、全てのペアの会話を全部聞いたわけではないので、今後はそれぞれの会話を録音して分析し、どのようなヒントや補助があれば学習者がもっと日本語で会話できるのか、また、学習者はどのような会話のストラテジーを使っているのか、どんなトピックに興味があるのかを探りたい。

**（注）**

1）　この3週間のプログラムへの参加は自由で、留学生の母校と交換可能な単位は出ず、本学で学ばずに上智大学のプログラムに参加することも可能である。

2）「日本語おしゃべりのたね」西口光一・沢田幸子・武田みゆき・福家枝里・三輪香（著）、スリーエーネットワークを参考に作成

3）　Begin Japanology (2009.5.15)「Tea Ceremony」、NHKワールド

**参考文献**

(1) 赤木浩文（2013）「日本語コースにおけるビジターセッションの学習効果と課題」『専修大学外国語教育論集』（41）87−104

(2) 関真美子（2007）「初級レベルのビジターセッションにおける学習者とビジターの「対等な関係」作り―ビジターへの「働きかけ」の試み―」, WEB版『2007年度日本語教育実践研究フォーラム報告』

(3) 永井涼子（2012）「日本語授業におけるビジターセッションの取り組みと意義―日本人学生・留学生双方の視点から―」『大学教育』第9号53−64

(4) ネウストプニー, J.V.（1991）「新しい日本語教育のために」『世界の日本語教育』1, 1−14頁

(5) ファン, サウクエン（2005）「開かれた日本語教室―ビジターセッションと外語大のグローバリゼーション」『外大における多文化共生：留学生支援の実践研究』神田外国語大学電子媒体2017.10月参照.

# A Practical Report on “Interactions between Absolute beginners of Japanese and Native speakers”

Miyuki DOI

**Abstract**

This is a practical report on class visitor sessions that were planned for students who studied Japanese at this institute for three weeks. Most of the students were absolute beginners of Japanese. This paper reflects on the activities of the sessions that were held between 2016 and 2017, reports the problems and how they were resolved. The main findings are: (1) most of the time, it was hard to arrange to have the same number of Japanese students as international students for each session; (2) giving specific discussion questions and “ask and fill in the chart” style work-sheets helped the participants to be more active and to continue their conversations; and, (3) observing the participants’ conversations will give the instructor some ideas of the necessary expressions that should be introduced in the handouts.

**KeyWords**：absolute / zero beginners, Japanese learning, visitor session, Japanese, interaction